

God Bless America?

－ 神学的アメリカ精神分析 －

江 口 再 起

《われわれは、パラダイスのような安全な国内が、グローバルな危険の地獄の中に宙づりになっているという歴史的な状況の中にひきずり込まれているのである。》(ラインホルド・ニーバー)¹⁾

１．9. 11 からイラク戦争へ

(1) 攻撃的な正義病

アメリカは「病氣」である。しかも、その根は深い。それは建国以来の慢性の病と言うべきであろう。しかし、それにしても、あの日、テレビ画面に映ったニューヨークの空は青かった。2001年9月11日の空である。青空の中、飛行機は吸い込まれるようにして、国際貿易センタービルにぶつかった。自爆テロである。その日を境に、被害をこうむったアメリカの病状は誰の目にも一段と悪化したように思える。一段と自らの「正義(jusutice)」を叫び、一段と攻撃的になった。そして、戦争が始まった。アフガンからイラクへ、戦火はひろがる。

しかし、戦争には、戦争の正当性(justificability)が必要である。そして正当性のためには、一貫性が必要である。だが、今回の、2003年3月に始まったイラク戦争には一貫性がない。全くない。致命的である。当初、アメリカはイラク攻撃の理由(戦争目的)として、「テロのネットワーク」を挙げていた。イラクと9. 11を起こしたテロ組織アルカイダの間に何か関係がある、それゆえ9. 11の報復のためイラクを攻撃すると言うのである(報復戦争)。しかし、両者の間

に関係がなさそうだとわかると、今度は、イラクに「大量破壊兵器」が隠されているから攻撃すると、戦争目的を変えた。大量破壊兵器の使用を予防し、危険の可能性に対しては先制攻撃をするというのである(予防戦争)。しかし、なかなか大量破壊兵器なるものがでてこない。つまり、そもそもないものは発見できない。するとアメリカは、イラクを攻撃する理由は「イラクの民主化」のためだと主張しはじめた。フセイン大統領の下で苦しんでいるイラク民衆を助け民主化するのだという(解放戦争)。このようにアメリカのイラク戦争の目的は、報復戦争 予防戦争 解放戦争という具合に二転三転した。一貫性がない。一貫性のないところには、当然、正当性はない。つまり、正義はないのである。

にもかかわらず、アメリカは「正義」を主張する。過剰に主張している。自らの起こした戦争を「正義の戦争」だと主張する。9.11の事件後、アメリカはアフガンに対して直ちに報復攻撃にでたが、それを当初、「無限の正義(infinite justice)」作戦と命名していた。もっとも、後で、それは少し言いすぎたと感じたらしく「不屈の自由(enduring freedom)」作戦と言い変えはしたが…。あるいは今回のイラク戦争に関して、フライシャー米大統領報道官は次のように発言した。《大統領の考えは、人間は自由でありたいと望むものだということだ。それはブッシュ・ドクトリンでもアメリカン・ドクトリンでもない。「ゴッド・ギブン・ドクトリン」なのだ》(読売新聞, 2003年4月10日夕刊より)

god given doctrine ! 誰であれ、自らの主張をそう考えるものは「病氣」であろう。攻撃性をともなった正義病なのである。

(2) ブッシュ大統領と「キリスト教原理主義」

「ゴッド・ギブン・ドクトリン」を唱えるブッシュ大統領の背景には、アメリカのキリスト教右派(「キリスト教原理主義」)の存在があると指摘されている。⁽²⁾ 彼は、1946年、第41代大統領のブッシュ(父)の長男として生まれる。イエール大学を卒業するも、1972年、コカイン所持で逮捕。1977年に結婚。教会は聖公会に属していたが、とくに熱心というわけでもなく、むしろアルコール依存症に苦しんでいたという。ところが、1986年、39歳のとき、歴代の大統領官邸

に出入りしブッシュ家とも親しかった大衆伝道師ビリー・グラハム牧師のもとで「回心」体験 (born again!) をする。これ以後、熱心なメソジスト教会員になったと伝えられている。そして、テキサス州知事を経て、2001年1月、キリスト教右派や全米ライフル協会などの応援を受け、接戦のすえ、第43代アメリカ合衆国大統領となったのである。当初、凡庸な大統領とみられていた。

だが、2001年9月11日がやってきた。その後のブッシュ大統領の行動力は素早かった。彼は直ちに、ビン・ラディン率いるテロ組織アルカイダと関係があるとされていたイスラム原理主義集団タリバンが実効支配していたアフガンに対して報復戦争を開始する。いわゆる「テロとの闘い」である。その際、彼は、ほとんどマニ教的な善悪二元論でもあるかのように「これは善と悪の闘争だ」と発言、更にはこの戦争は「十字軍 (crusade)」であるとも発言した。さすがにこの十字軍発言は、そうでなくとも懸念されていたキリスト教文明対イスラム文明という「文明の衝突」(ハンチントン)を不必要に煽るものだと批判され取り消しはしたが、恐らくブッシュ大統領及びその周辺にとっては本音であったであろう。

さて、こうしたブッシュ大統領の行動や発言の多くは、彼の個人的な政治信念や個人的な宗教的嗜好の問題であるとも言えよう。しかし、それは他面から見れば、今日の、いや建国以来の過去をも含めてのアメリカという国の精神的土壌の一端を、ある意味で象徴的に体現しているようにも見えるのである。それが一体何か、それを以下、我々は考えていきたいのである。

2. 新しい世界

(1) ドボルザーグの「交響曲第9番 新世界より」

19世紀の後半、とりわけ南北戦争(1861 - 65年)の後、アメリカは急激に工業化、都市化の道を邁進しはじめた。数字で示せば、19世紀の最後の20年間で、総人口に対する都市人口の比率は、28%から40%へと急上昇している。こうした中、1892年から95年にかけて、一人のヨーロッパの音楽家がニューヨークの

ナショナル音楽院の院長として招かれ、アメリカに滞在中。チェコの作曲家ドボルザークである。そして、彼がその滞在中、作曲したのが「交響曲第9番」、すなわち「新世界より」である。そこには黒人やインディアン音楽の特色も取り入れられていると言われるが、私には何かさびしくもあり、またなつかしくもあるような曲調に聴こえる。ドボルザークは、アメリカという新しい文明世界に出会い、ヨーロッパという自らの属する古い世界の没しゆくさびしさを感じていたのだろうか。あるいは逆に、新しい世界と見えるアメリカが、それゆえにこそかかえもつ未来への根なし草的なさびしさを、この曲に表現したのだろうか。両方かもしれない。

ところで、今回、アメリカがイラク戦争に踏み切るに当たって、アメリカとヨーロッパ（フランスやドイツ）との間に激しい対立が生じた。その際、アメリカの国防長官ラムズフェルドは、戦争に反対するフランスやドイツに対して「古いヨーロッパ」と言い放った。確かにそうである。独立建国後まだ2世紀しか歴史のないアメリカに対して、ヨーロッパは古いのである。

さて、その古いヨーロッパから、今から100年前の20世紀の初頭、ヨーロッパの伝統と知を体現したかのような代表的な2組の思想家たちがアメリカを訪問している。マックス・ウェーバーとエルンスト・トレルチ、そしてジグムート・フロイトとグスタフ・ユングである。古いヨーロッパからやって来た思想家たちのアメリカ体験。彼らの目に、新世界はどう映っていたのだろうか。

(2) ウェーバーとトレルチ

20世紀になって4年目の1904年、セントルイスで世界博覧会が開かれた。それを機に開催された学術講演に招かれて、ウェーバーとトレルチは4ヶ月に渡りアメリカを旅行している。ドイツでは心身ともに何かと調子の優れないウェーバーであったが、この旅行中、彼はたいへん元気であった。妻のマリアンネの回想によれば、ウェーバーは船酔いを気にすることもなく、船の中で飲まれた食事はぜんぶ食べた。それに対し、万事に慎重なトレルチは明らかに飲食も節制しており、旅行中においてもきわだったエピソードはない。もちろん、

この旅行で得たトレルチのアメリカ観察は、後年の大著『キリスト教会及び諸集団の社会教説』(1912年)や晩年の「ヨーロッパ的文化総合」の試みの中に生かされている。だが、ここでは妻マリアンネの回想記に生きと描写されているウェーバーのアメリカ体験をみておこう。

ともかくドイツにいたときとは打って変わって、アメリカでウェーバーはとも元気であった。《9月のある早朝、青空にそそり立つ摩天楼を眺めながらニューヨーク港に船は入ったが、ウェーバーは税関の検査や上陸手続きをほとんど待ちきれず、気負い立った爽快な足取りで船から飛出して行った》。⁽³⁾ 伝統を感じさせる重厚で歴史的な景観を今でも保っているドイツの大学町ハイデルベルクからやってきた知識人ならば、ニューヨークの林立する摩天楼を見て違和感、いや嫌悪を感じたとしても不思議ではないが、ウェーバーはちがった。母親ヘレーネに宛てた手紙の中で、彼はこう書いている。《私は「摩天楼」をも「醜悪」と見ることはできませんでした。これはたしかに「美しく」はありませんが、しかし美の反対ではなく、美醜を超越しています》。⁽⁴⁾

古いヨーロッパからやって来たウェーバーは、アメリカを嫌悪するどころか、むしろ逆に大変な関心をかき立てられたのである。理由の一つは、このアメリカこそが彼が現に今、研究しつつあるテーマ、すなわち資本主義とプロテスタンティズムの相関関係それ自体を体現しつつある世界そのものだったからであろう。このアメリカ旅行は、実際、彼の主著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1905年)を執筆している、まさにその途中になされているのであり、この書物の主人公の一人、ベンジャミン・フランクリンはアメリカ建国の父祖の一人なのである。ウェーバーは、「資本主義の精神」に翻弄され喧騒に満ちあふれたニューヨークやシカゴを見て、妻マリアンネにこうつぶやく。《御覧、近代的な世界とはこんなものなんだよ》。⁽⁵⁾ そのシカゴで、マリアンネは次のような体験を書き留めている。《建物の柱にはちょうど「シカゴのキリスト」というポスターが出ていた。これは不遜な侮辱ではなかろうか？ ちがう、ここにもこの永遠の精神の息吹が通っているのだ》。⁽⁶⁾ 事実、ウェーバーはアメリカの中に一方で「資本主義の精神」を見つつ、他方で「永遠の精神」に生きる人々

の姿をも、すなわちフィラデルフィアではクエーカー派の沈黙の礼拝を、そしてニュー・オーリーズでは川辺で行われていたバプティスト派の洗礼を、その生きた姿を感動をこめて見学したのである。帰国後、彼はこうした体験をもとに「アメリカ合衆国における教会とセクト」という論文を書いている。⁽⁷⁾

しかし、この新世界でウェーバーが目にとめたものは、資本主義とプロテスタンティズムの相関関係ばかりではなかった。黒人とインディアンの問題、これにもウェーバーは深い関心を示した。たとえば、黒人と混血したものはすぐに社会的資格を剥奪されるのに、インディアンとの混血はそうではない。これは一体、何故であろうか。その違いの原因を、ウェーバーは、黒人が「奴隷であった」のに対して先住インディアンはそうでなかったところにある、と考えた。つまり、ここからウェーバーは、差別というものを「人種」でなく、人間のつくりだした「カスト・制度」にその原因があると考えていったのである。⁽⁸⁾

いずれにせよ、ウェーバーはたいへんな関心をもってアメリカを体験した。さて、では彼は結局のところ、アメリカをどのように考えたのであろうか。簡単ではない。しかし、私は彼の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の末尾の、次の文章が一つのヒントになると思う。ウェーバーはこう書いている。《ともかく勝利をとげた資本主義は、機械の基礎の上に立って以来、この支柱〔プロテスタンティズムの倫理にもとづく禁欲の精神のこと 引用者〕をもう必要としない。…営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向がある。…こうした文化発展の最後に現れる「末人たち」にとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。「精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、人間性のかつて達したことの無い段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう」と》。⁽⁹⁾

(3) フロイトとユング

1909年、ウースターのクラーク大学の20周年記念の講演会に招聘されたフロイトとユングは、アメリカを旅行した。⁽¹⁰⁾ しかし、このアメリカ体験で得た二人

の印象はずい分ちがう。骨の髄までギリシャ神話や聖書やシェクスピアといった「古いヨーロッパ」の教養圏に生きていたフロイトは、アメリカにもう一つ親しみを感じることができない。違和感があった。旅行中に胃腸障害や虫垂炎の再発すら起こしている。結局、彼はこう言っている。《アメリカという国は世界がなした最大の実験である。しかし失敗するのではないかと思う》。⁽¹¹⁾

それに対し、ユングは全くちがっていた。ユングにとってアメリカ体験は決定的に重要であった。アメリカの中にある野性的原初性に彼は強くひきつけられたのである。具体的に言えば、もともとはアフリカ人である黒人やアメリカ原住民であるインディアンの中に、ユングは人類における原初性を見出したのである。そしてそれが、人類の集合的無意識を探索し「元型（アーキタイプ）」の思想へと展開していったその後のユングの学問を、決定づけたのである。彼はこの後も何度かアメリカを訪問しており、その折にはアメリカの精神病院を訪れて黒人の夢を分析したり、プエブロ・インディアンの村落を見学したりしている。そして、こうしたアメリカ体験と思索の中から、ユングはアメリカ人の黒人化、アメリカ人のインディアン化を見出したのである。

ヨーロッパの移民であるアメリカ人の心の中に、ある種の変容が起きている。つまりアメリカ人の集合的無意識には、黒人やインディアンの心性の深い影響がある、とユングは考えたのである。アメリカ人の心の「影」に、黒人とインディアンがいる。黒人やインディアンへのコンプレックスがある、と言うのである。たとえば、アメリカ人の笑い方、独特の歩き方や腰の振り方、ジャズやダンス、またとめどない饒舌な話し方などなど、これらはみな黒人の影響である。またアメリカの学生組合の加入儀礼の野蛮さはインディアンの部族の通過儀礼の伝染であり、ニューヨークの摩天楼はインディアン部落の天に向かった高い建物の映しなのだ。アメリカに移住したヨーロッパ人の末裔が築いた、その物質文明のただ中に、逆に心の逆行（ゴーイング・バック）が起きているのであり、これがアメリカなのである。

しかし、もちろんヨーロッパ人の末裔たるアメリカ人も、いやユングを含めてヨーロッパ人全体が、それに表向きは気付いていない。気付いていないから、

心はますますゴーイング・バックする。だが、ヨーロッパ人が、黒人や先住インディアンに何をしたのか、それにやがてユングは深く気付いていった。植民地化、異教徒への宣教、文明の拡張、これである。ユングは、1924 - 25年にもアメリカを旅行しているが、そのとき彼はプエブロ・インディアンの村落を訪れ、50歳ぐらいのオチウェイ・ピアノ（山の湖の意）という名の村長とじっくりと話し合う機会をもった。後年、ユングはこの時の会話を思い出しつつ、その『自伝』に、次のように書いた。長いが、引用する価値があると思うので、引用しておこう。《〔話しおえて〕私は長時間、瞑想にふけた。私の生涯ではじめて、誰かが私に対して、真の白人像を描いてくれたのだと、私には思えた。...このインディアンがわれわれの弱点を衝き、われわれには見えなくなっている事実を明らかにしてくれた。私の心のなかに...かわるがわるにイメージが別れて出てきた。つまり、まずゴールの諸都市と激突したローマの軍隊、ジュリアス・シーザー、...。それからローマ槍騎兵の先頭で、ブリトン人たちにキリスト教の信条を説いている聖アウグスチヌスを見た。そしてシャルルマーニュ大帝の栄光に満ちた異教徒の強制回心を見た。さらにそれから、十字軍の略奪と殺戮の軍隊を見た。...それに続いて、コロンブスやコルテスや、その他のスペイン人征服者たちを見た。彼らは火薬や剣や拷問や、キリスト教をもって、彼らの父なる太陽のもとで平和に夢みていた、はるかかなたのプエブロ人たちのところにまでもやって来たのである。また太平洋の島々の住民たちも、火薬や梅毒や、宣教師たちに強いて着せられた衣服によってもたらされた猖狂熱のために多くの人たちが倒れていくのを見た》。⁽¹²⁾ これがアメリカという鏡にうつったヨーロッパ人の一つの自画像なのである。

3．ピューリタニズムと啓蒙思想 人工国家アメリカの神学的構造

(1) アメリカ建国の二つの理念

アメリカは人工国家である。宗教上の理由で、つまり自らの信仰を純粋に守るために、ヨーロッパの故国を離れ新大陸へとやって来た移民たちの国である。

それゆえ、アメリカという人工国家には明確な建国の理念がある。二つある。ピューリタニズムと啓蒙思想である。⁽¹³⁾ ラインホルド・ニーバーは、それを次のように言っている。《アメリカ建国初期の生活を形成したニュー・イングランドのカルヴィニズムと、ヴァージニアの理神論及びジェファソン主義という二つの大きな宗教的・道徳的な伝統》があると。⁽¹⁴⁾

二つの建国の理念。一方は、建国を神と人との関係を軸にして考えている。他方は、人と人との関係を軸にして考えていく。まず前者、神と人の関係を軸にした建国の理念。それは、自らを神の恵みによって選ばれた民と理解する。広く深い意味での選民思想といってよい。そこには、神の恵みに対する深い感謝と選ばれたことへの強い自覚がある。まさにピューリタニズムの信仰である。そしてこれこそが、1620年にあのメーフラワー号に乗ってアメリカ大陸にやってきた「巡礼の父祖たち(Pilgrim Fathers)」のピューリタニズムの内実なのである。後年、第三代の大統領になったトマス・ジェファソンは次のように言う。《われわれの父祖たちは、昔イスラエルがそうであったように、彼らの祖国から導き出され、必要なものを与えられ、豊かさに満ちた国に住むこととなったのである》。⁽¹⁵⁾ 「イスラエル」という言葉を、神に選ばれた民と解釈すれば、まさに「アメリカン・イスラエル」の理念と言えよう。

建国の理念のもう一方は、建国を人と人との関係を軸にして考えるのである。人間相互が契約を結びそれを守る。デモクラシーの思想と言ってもよい。そして、これこそが、1776年にイギリスとの独立戦争に勝ち抜きあの「独立宣言」に署名した「建国の父祖たち(Founding Fathers)」がいだいた啓蒙思想の内実である。それには前史がある。と言うのは、メーフラワー号に乗ってアメリカにやってきた人々の数は102人であったが、実は全員が信仰深いピューリタンというわけではなかった。ピューリタンたちは「聖徒(セイント)」と呼ばれ、男17人、女10人、子供14人の実は41人であった。それに対し信仰上の理由でなく、金もうけその他の理由でメーフラワー号に乗船していた人たちは「よそ者(ストレンジャー)」と呼ばれ、男17人、女9人、子供14人の40人であった。その他に奉公人が21人おり、結局、総勢102人のうち、「聖徒」が41人、「よそ者」が40

人、そして奉公人が21人ということになる。⁽¹⁶⁾ つまり、メーフラワー号に乗ってやって来て、アメリカを建りはじめた人々たちは、決して信仰で結びついた一枚岩の集団ではなかったのである。それゆえ、今から始まる新しい大陸での生活では、今までの思想信条や身分が何であれ、厳しい共同の生活を荷ってゆくためには、相互に契約を結びそれを守ってゆかねばならなかったのである。そこでプリマス上陸の直前、船上で共同生活の約束を取り交わした。それが有名な「メーフラワー・コンパクト(盟約)」といわれるものである。このようにして人と人とが相互に尊重し合い、約束を守ることによって事を運んでいく新大陸での生活が始まった。そして、こうした理念こそがメーフラワー号の約150年後、独立を成し遂げた「建国の父祖たち」の啓蒙思想を形づくることとなったのである。「デモクラシー」という言葉を、人間どうしが互いに尊重することと解釈すれば、まさに「アメリカン・デモクラシー」の理念と言えよう。

(2) 言葉の力

人間とは、つまるところ言葉である。と言うことは、人間の営みは、言葉の力による。ここで精神分析学者E・H・エリクソンの言葉を紹介したい。ユダヤ系デンマーク人を母に、ユダヤ系ドイツ人を養父にドイツで育ったエリクソンは、1933年にアメリカに移住し、後にアメリカの代表的な公的知識人の一人となった。彼は、トーマス・ジェファソンをプロテウス的大統領として描き(“Dimensions of a New Identity”, 邦訳『歴史の中のアイデンティティ』)、他方でマルティン・ルターをエディプス的宗教改革者として描いたが(『青年ルター』)、そのルター研究の動機の一つとしてこういうことを書いている。《若い頃、画家を目指して放浪していた私は、ある晩、ライン河上流の小さな村にある友人の家に泊めてもらったことがある。友人の父はプロテスタントの牧師であった。翌朝、家族の者が朝食の席に着くと、この年配の父親は「主の祈り」をルターのドイツ語で捧げた。私は「意識して」それを聞いたわけではなかったが、短い簡単な言葉によって全体がとらえられたような、あるいは、美的なものと道徳的なものが混在した詩のような、後にも先にもない経験をした。ゲ

ティスバーク演説を突然「耳にした」ことがある人ならば、こうした私の思いを理解してくださることだろう。⁽¹⁷⁾ ルター訳の「主の祈り」の言葉、リンカーンの「ゲティスバーク演説」の言葉。言葉の力が、人を動かし国家を動かし、そして歴史をつくるのである。

さて、アメリカの歴史を眺めてみる。すると、数々の言葉が宣言や演説の言葉となって、アメリカの歴史をつくってきたことがわかる。そして、注目すべきは、そうした宣言や演説の中に必ずと言ってよいほど、先に言及した建国のあの二つの理念が言葉となって表現されているという事実である。二つの理念、それをここでもう一度、整理しておけば、一つはアメリカの建国を神と人との関係を軸にして理念づけた「巡礼の父祖たち」のピューリタニズム、つまりより具体的に内実在即して言えば、アメリカン・イスラエルの思想である（これを理念Aとしておこう）。もう一つはアメリカ建国を人と人との関係を軸にして理念づけたワシントンやジェファーソンら「建国の父祖たち」の啓蒙思想、つまりアメリカン・デモクラシーの思想である（これを理念Bとしておこう）。この理念Aと理念Bが言葉となって、アメリカの国家意志を表現し、歴史を形成していく。それを具体的にみておきたい。（わかりやすくするために、引用の文章の中に、記号A、Bを挿入して示す）

まず1620年の「メーフラワー・コンパクト(盟約)」。

プリマス上陸直前、メーフラワー号の船上で起草された合意文書であり、しばしばデモクラシーの起源として論じられる文書である。《...ここに、神の御前において(A)、この書類によって厳粛にお互いどおし相互に契約を交わし(B)、...みずからを政治的な市民団体に結合することにした》。⁽¹⁸⁾ この「メーフラワー・コンパクト」は単にアメリカン・デモクラシーの文章ではない。これは「神の御前において」なされたアメリカン・イスラエルの文章でもあるのである。

1776年のアメリカの「独立宣言」は、ジェファーソンが起草したものであるが、その中に次のような文言が記されている。《すべての人間は神によって平等に造られ(A)、一定の譲り渡すことのできない権利をあたえられており、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている(B)》。⁽¹⁹⁾ この文章は、

高らかにすべての人間が平等で自由の権利があると宣言しているが、これこそ、まさにデモクラシーの思想である。だが肝心なことは、すべての人間がたんに平等で「ある」のではなく、平等に神によって「造られた」ということなのである。ここにもアメリカン・イスラエルの思想が前提となっていると言えよう。

1863年11月、南北戦争のさなか、その激戦地ペンシルベニア州ゲティスバーグでリンカーン大統領は、国民の統合を呼びかける演説をした。「ゲティスバーグ演説」である。リンカーンはこう語ったのである。《87年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等に造られているという信条に献げられた(A , B)、新しい国家を、この大陸に打ち建てました。…〔この未完の大事業に、今、われわれが身を捧げるということは〕この国家をして、神のもとに(A)、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして人民の、人民による、人民のための(B)、政治を地上から絶滅させないため、であります》。⁽²⁰⁾ この演説は、ニューヨークで開かれた9.11の一周年追悼式典でも、そのまま朗読された。百万言を費やすより、この演説の朗読だけの方が、人々の心を打つからである。それにしても、「人民の、人民による、人民のための」というアメリカン・デモクラシーを高々とうたい上げるくだりばかりが有名だが、ここでも、その前提として「神のもとに」というアメリカン・イスラエルの思想がやはり息づいているのである。

さて、最後に2003年3月31日、フィラデルフィアでなされたブッシュ大統領の「イラク戦争演説」もみておこう。この演説はどこか猿まねじみて、決して偉大でもなく格調高くもないが、しかし、確かに歴史の歯車を回したのであり、ここにもやはり例によってアメリカン・イスラエルの思想とアメリカン・デモクラシーの思想が言葉となって人々に届けられたのである。《すべての人間が平等に造られ(A , B)、自由なる権利をもっている(B)。…これはアメリカ人にもイラク人にも真実であり、今、われわれアメリカ人はその自由の大義のために勇敢に戦っている》。⁽²¹⁾

(3) アメリカの市民宗教とその空洞化

アメリカという国は、ピューリタニズムと啓蒙思想によって建てられた国である。より内容的に言いかえれば、アメリカン・イスラエルの思想とアメリカン・デモクラシーの思想の国である。こうした理念によって建国された人工国家アメリカは、それ故、ある意味で宗教国家と言わなければならぬだろう。「祈る大統領」と言われるブッシュが、夜のテレビ演説を「おやすみなさい、神の加護がありますように」と締めくくる国である。

したがって、ここで注意を要するのは、近代社会の一つの目印ともなるいわゆる「政教分離」の意味である。⁽²²⁾ アメリカとヨーロッパ諸国（そして、日本）とでは、その意味が微妙にちがう。ヨーロッパの場合、政教分離は17世紀のあの血を血で洗った壮絶な宗教戦争（「30年戦争」）に苦しみ抜いた結果の苦渋の決断としての、「私的信仰」と「公共的政治」との分離のことを指す。それに対し、アメリカの場合、そもそも「宗教の自由」とは日本で理解されているように「宗教からの自由」、つまり宗教から離れ関わらない自由ではなくて、逆に「宗教への自由」、つまり宗教を追求し関わる自由であり、したがって政教分離とはそもそも宗教を前提としつつも（この場合、無意識において、明らかに聖書の神が思い浮かべられているが）、国家が「ある特定の教派・宗教団体」と結びつかないという意味での政教分離なのである。言うまでもなくアメリカはアメリカン・イスラエルの理念の下、人工的に作りあげられた国家である。ただその国家は、その限りにおいて、すべての教派、宗教団体を平等に扱うのである。

さて、こうであるから、アメリカン・イスラエルの思想及びそれと深く関連したアメリカン・デモクラシーの思想こそが、アメリカの「市民宗教（civil religion）」と言ってよいであろう。市民宗教という言葉は、もともとJ. J. ルソー（『社会契約論』）にでてくるが、アメリカの宗教社会学者ロバート・N・ベラーによって深められた概念で、ある共同体（国家）を統合させている宗教的な自己理解のことである。アメリカは自己のことを、どのように理解しているか。神の恵みによって選ばれた民と思っている。また、そうであるから相互に尊重し合い自由と平等の権利を有していると思っている。アメリカン・イスラエル及

びアメリカン・デモクラシーの思想である。つまり、当然のことではあるが、アメリカの建国の理念こそが、アメリカの市民宗教を形成しているのである。

ベラーは、そうしたアメリカの市民宗教を「回心 (conversion)」と「契約 (covenant)」という言葉で捉えた。⁽²³⁾ 《…もともと植民地時代のプロテスタント教会で、絶えず問題になっていた回心と契約との間の弁証法的関係》があった。⁽²⁴⁾ 「回心」とは、自由と解放をもたらす救済体験であり、また「契約」とは、回心による内的革新を統制秩序づけ、憲法へと至りつかせる市民社会の基盤である。一方は内的信仰に関わり、他方は公共的政治に関わる。一方はアメリカン・イスラエルに関わり、他方はアメリカン・デモクラシーに関わる。そして、この両者の弁証法的関係が大切なのである。両者の分離でなく、逆に両者の緊密なバランスが必要なのである。これがアメリカの市民宗教であり、そこにアメリカという共同体が成り立っていたのである。

ところが、このバランスが崩れていく。《契約は、結ばれると殆ど同時に破り棄てられてしまった。アメリカ人は長い間、この事実から目をそらし、契約が破棄されているということを何とか否定して来た》。⁽²⁵⁾ 破棄の事実とは、インディアン問題であり、黒人問題である。そして、どうなったか。ベラーはこう書いている。《今日、アメリカの市民宗教は、中が空っぽのこわれた貝殻のようなものである》。⁽²⁶⁾

アメリカという国の神学的構造を、ここでまとめておこう。アメリカは、「巡礼の父祖たち」のピューリタニズムと「建国の父祖たち」の啓蒙思想とを理念として建国された国である。つまり、一方で神と人との関係ではアメリカン・イスラエルであり、それゆえ回心が大事なものとされ、他方で人と人との関係ではアメリカン・デモクラシーであり、それゆえ契約が大切なのである。そして、この両者の弁証法的関係こそが、アメリカの市民宗教を形づくっていた。しかし、このアメリカの建国の理念、そしてそれに基づくアメリカの市民宗教、それが今や「空っぽのこわれた貝殻」になっているのである。

４．トラウマとアイロニー アメリカ精神分析

(1) トラウマ論

アメリカの市民宗教は空っぽのこわれた貝殻のようだ、とロバート・Ｎ・ベラーは言う。ラインホルド・ニーバーも《アメリカにおけるピューリタニズムからヤンキーイズムへの後退》⁽²⁷⁾を指摘した。私は本論考の最初のところで、アメリカは「正義病」として書いたが、それは精神分析学者岸田秀の言い方を借りたのである。ともかくアメリカは空洞化しており、ヤンキーイズムへの後退が見られ、正義病である。そこで、この病気の原因と治療の方法を探るべく、「アメリカ精神分析」を試みてみなければならないが、アメリカ精神分析とは、「アメリカ精神の分析」であり、「アメリカの精神分析」でもある。⁽²⁸⁾

さて、言うまでもなく精神分析とは「無意識を意識化する」ことであるが、そのためにはアメリカの無意識を過去に溯って意識化してゆかねばならない。岸田秀のアメリカ診断をみていこう。⁽²⁹⁾ 岸田はアメリカを「正義病」と診断するが、その原因を端的にアメリカの建国過程にはらまれたトラウマ(コンプレックス)にあると考えている。アメリカの症状とは、こうである。何か好ましくない事が生じる。その時、どう反応するか。そこに症状があらわれる。まず、はじめにほとんどいつもアメリカは自分を被害者であると意識する。自分は悪くない、他者が悪いと考える。つまり他罰的性格なのである。それ故、常に敵をつくる。しかも、味方をも必ずと言ってよいほどにやがて敵にまわす。常に自分の絶対的な正義を主張する。そこで、しばしば相手に対して無条件降伏を迫るのである。また自己を正当化するのみならず、「解放者である」というセルフ・イメージをもっているため、結局、膨張性を身に帯びてしまう、等々。

こうした正義病の原因は、どこにあるのだろうか。まず、第一に押さえるべきは、メーフラワー号をはじめ、そもそもヨーロッパから新大陸にやって来た移民の人々のことである。彼らは自らのピューリタニズムの純粋な信仰を守り、新しい土地に理想の国をつくるためにアメリカ大陸に渡ってきた。それはそうだが、しかし、それは他面から見れば、彼らはヨーロッパでの宗教戦争に敗れ

て故国を脱出せざるを得なかった「敗者」だったという事実である。敗れた人々が、ヨーロッパで抑圧を受け傷つき、新大陸に脱出してきた。それ故、そこには当然、強い被害者意識が潜んでいたことだろう。そこで、その強い被害者意識が無意識のうちに逆転し、新大陸に住むにあたって先住インディアンと共存するどころか、強い攻撃性となって現れ、インディアンの虐殺と排除を繰り返しつつ建国の道を歩んでしまったのである。ここに問題がある。強い被害者意識をもった集団がより攻撃的となる、そして自らの受けた抑圧を他者に移譲する。フロイトのいう「抑圧の移譲」である。つまり、抑圧を受けた敗者であったという自らの傷、その事実を自分はアメリカン・イスラエルであると自らにいい聞かせ抑圧したため、そこに「抑圧の移譲」が起り攻撃的となり、先住インディアン虐殺をひき起こしたのである。しかも、このインディアン虐殺と土地の略奪をも、神に選ばれた理想の国の実現ということで、自らの罪悪感を抑圧し正当化したため、以後、トラウマの反復強迫がアメリカ史の中を一本の赤い糸のように貫くこととなったのである。

トラウマは反復強迫する。先住インディアン虐殺と土地の略奪に続いて、奴隷貿易によるアフリカ黒人の奴隷化と差別、スペインやメキシコやハワイに対する領土拡大戦争による国家の膨張（フロリダ、テキサス、カルフォルニア、ハワイ、...）。1845年、ニューヨークのジャーナリストであったジョン・L・オサリバンは、当時、問題になっていたテキサス併合について、その正当化の論文「併合（Annexation）」を書いたが、その中で世界全体へのアメリカの拡大膨張を、神に与えられた「明白な天命（manifest destiny）」と捉えた。《年々増加してゆく幾百万のわが国民の自由の発展のために、神に与えられたこの大陸にわれわれが拡大するという、明白な運命の偉大さ...》⁹⁰⁾

自らが抑圧されていたことをまた抑圧する、そこにトラウマの反復強迫が起こる。これが岸田秀のアメリカ精神分析である。そして、ここで気付くことは、アメリカの建国の理念から考えても当然ではあったが、アメリカのこうした「正義病」には、神や罪の問題が、つまり神学問題が深く関わっているという事実である。この点を次にラインホルド・ニーバーと共に考えてみよう。

(2) アイロニー論

ラインホルド・ニーバーは、預言者的洞察をもってキリスト教的リアリズムを唱えたアメリカの「冷戦の神学者」である。若き日のマルクス主義的傾向から離れ、第二次大戦後は Kommunizmus 的(ユートピア的)全能感を批判して「力の均衡」を主張し軍縮を批判、しかし他方でベトナム戦争時代にはアメリカの全能感を批判して軍拡を批判した。ルター的な罪への洞察とカルヴァンの責任性を、その神学の背景にもつ。

さて、ニーバーのアメリカ診断は、アイロニー(irony)としてのアメリカということである。彼は今から約50年前、『アメリカ史のアイロニー(The Irony of American History)』(1952年)という本を書いているが、それは今日、読めば驚くべき予言の書となっている。本論考の最初にも引用したが、次の言葉などまさに9.11以後のアメリカを言い当てているかのごとくである。《われわれはパラダイスのような安全な国内が、グローバルな危険の地獄の中に宙吊りになっているという歴史的な状況の中にひきずり込まれているのである》。⁽³¹⁾

ところで、ニーバーが言うアイロニーとは、正反対のものが併存する不調和チグハグさ、しかも一方が他方の隠れた原因となっている不調和のことであるが、⁽³²⁾ 彼はアメリカについて次のように言う。《人間性や人間的なことをこれほどまで強調してきた文化が、これほどにまで非人間的な様相を呈するようになった》。⁽³³⁾ また《われわれは地球規模の責任を担えば担うほど貧しくなる》。⁽³⁴⁾ アメリカがある事をすればするほど、結果はその意図していたことの反対となるのである。これがアイロニーである。より具体的に事例を挙げれば、たとえばアメリカは「意識的」には必ずしも強国大国をいつも求めていたわけではないが、結果として史上最大の強国大国になっている。あるいは原子爆弾の製造、それは決して使用しえないために、ますます大量に製造せざるを得ない。あるいは戦後の日本への態度、つまり新憲法で非軍備化を求めつつ、そうすればそうするほど他のアジアの国々との情勢の中で、日本に再軍備を要求せざるを得なかったのである。⁽³⁵⁾

ニーバーは「アイロニー」ということを、「悲哀(ペーソス, pathos)」や「悲

劇(tragedy)」との対比の中で考える。幻想をはぎ取ってリアリズムで考えてみれば、人間は不条理な悪い結果に直面しつつ生きていくものであるが、それをどう考えるか。「悲哀(ペーソス)」とは、その人に選択の自由がなく、そして結果が不条理でよくないという事態に直面することである。この場合、その人に責任はない。(たとえば、自然災害の犠牲者、収容所で死んでいった人々...)。それに対し「悲劇」とは、その人に選択の自由がある。その人は善き意図をもち、しかし、結果の悪いことを予見しつつあえて行動する(善をなすために、あえて悪を選択する)。そして当然、結果は悪い。この事態が「悲劇」であり、この場合、当然その人に責任がある。しかし、あえて事を起こした分だけ、崇高さを帯びたりもする。(たとえば、自爆テロの悲劇的英雄)。では、「アイロニー」とは何か。その人に一見、選択の自由がある、そこでその人は善き意図をもって行動するが、しかし、結果は意図に反し不条理でよくない。この事態が「アイロニー」で、この場合、その人に選択の自由があり行動したのであるから、責任はある。責任はあるが、結果はその人の意図とはチグハグで不調和なのである。

さて、そこでアイロニーが問題である。ニーバーはアメリカが陥っているのがそれであり、その結果として生じた事態を不調和・チグハグ(incongruity)と言うが、一体、どうしてそうになってしまうのか。つまり、アイロニーが生じる原因である。それに答えるためには、神学的人間観に光を当てねばならない。すなわち、アイロニーの発生を考えるためには、人間の被造物性、つまり人間は神ではなく神によって造られたものであり、したがって全的に自由な存在でなく、自由かつ不自由な存在、つまり相対的存在であり、かつそれで十分であるということ熟慮する必要があるのである。人間は神の被造物として自由かつ不自由な存在である。ところが、そうであるにもかかわらず人間は自らを自由であると「思い上がる」のである。ここにアイロニーが発生する。ニーバーは次のように言う。《〔聖書の〕神が妬むという場合、それは人間が人間の自由の限界を守ることを拒否する場合なのである。...〔こうした〕思い上がりこそ、強さが弱さと化したり、知が愚を吐くようになるというアイロニーの源泉なので

ある》。⁽³⁶⁾

アメリカは、まさにそうしたアイロニーに陥った。自らを全的に自由であると、自己理想化し自己過信に陥ったのである。ニーバーは、3つの点からそれを考察する。第1点は、アメリカの繁栄と成功をめぐってである。なぜアメリカは繁栄できたのか。ニーバーの指摘は、こうである。《…後期のピューリタンから今日に至るまで、われわれアメリカの繁栄を、われわれの卓越した勤勉さ、大いなる技術力、そして自由の理念に対する情熱的な献身のためだと考えてきた…。〔しかし〕われわれは、われわれの成功の基盤に、この国の天然資源の豊かさ、そして技術の革新がこの大陸を統一的な政治的、経済的な組織として確立できたことによって、この大陸を征服できた、という偶然的事情があったことを忘れてしまっている》。⁽³⁷⁾ つまり、アメリカの成功の理由、それは自然条件の良さであり、それ故それは神の恵みという他なく、決してアメリカ人の徳・信仰・努力のゆえではないのである。第2点はアメリカン・イスラエルの思想、つまり選民思想に関わる。神の恵みによって選ばれたということは、ただひたすら神の恵みであって、選ばれた人の誇ることではない。しかし、しばしばそこに自己理想化がしのびこむ。《われわれは神によって召されたいわば「アメリカン・イスラエル」であった。…しかしわれわれはそのことによって幻想に巻き込まれ、さらに実際に経験している現実と理想との間のアイロニックな矛盾に巻き込まれることになったのである》。⁽³⁸⁾ 第3点はイノセントの幻想の問題である。なぜアメリカは繁栄し強国となったのか。自然条件の良さがあった。しかし、更にはそれにも増して、他者を侵略したからである。先住インディアンを虐殺し土地を略奪し、黒人を奴隷として使い、そして領土拡大戦争に勝ち抜いたからである。しかし、アメリカは、そのことに目を向けない。目を向けたくない。自らをイノセントと信じこもうとしてきたのである。そこにアイロニーが発生する。ニーバーはこう書く。《もちろん、アメリカは、子供がイノセンシーのシンボルとして用いられるにもかかわらず実はそれほどイノセントではないのと同じように、われわれがそう装っていたほどにイノセントなものではなかった。われわれの道に立ちふさがりいかなる主権にも対抗して、オレゴン、カ

ルフォルニア，フロリダ，テキサスに対する権利を主張し大陸全体に拡張したわれわれの幼児期の力は，イノセントなものではなかったのである。これこそ，新しい共同体〔アメリカ〕の権力意志のあらわれであって，それは勇敢な開拓者や移民たちのあくなき土地渴望から出てきた帝国主義的拡張力の具現であった》。⁽³⁹⁾ アメリカはイノセントではありえない。しかし，イノセントの幻想で生きようとする。するとこうなる。《こうして「イノセント」な国家の歴史は，最終的にその歴史におけるもっともアイロニックなクライマックスに至ったのである。…われわれは原子爆弾の使用の可能性を否定することができなくなった》。⁽⁴⁰⁾

アイロニーとしてのアメリカ。それは，メーフラワー号のピューリタニズムと啓蒙思想から出発しながら，ついには成功主義と拝金主義に色どられたアメリカン・ドリーム(バベルの塔としての摩天楼)⁽⁴¹⁾と原子爆弾というアイロニックな現実へと行き着いたのである。

では，このアイロニックな現実を前にどうしたらよいのであろうか。ニーバーの答えは簡潔である。「悔い改め」，これである。人間がイノセントではありえない，つまり罪ある存在であることへの熟慮，これである。《要するに，アメリカの歴史におけるアイロニックな要素は，アメリカ的アイデアリズムが，人間の努力の限界性，人間の知恵の断片性，権力の歴史的な形態の不確実性，そして人間の徳の中に悪と善とが入り混じっているという現実を受け入れることができるときにのみ克服され得るのである》。⁽⁴²⁾

アメリカは，ニーバーのいう「悔い改め」の次元にたどり着けるであろうか。2003年12月，一つの新聞記事が私の目にとまった。広島に原爆を投下したB21爆撃機の「エノラ・ゲイ」の完全復元機が，バージニア州にあるアメリカ国立スミソニアン航空宇宙博物館の新館に展示されることになったという記事である。しかし，それによれば，展示はあくまで航空技術の発展史を伝えるのが目的なのであり，それ故，広島・長崎の死傷数など原爆被害については一切ふれないという。ここからもわかる通り，アメリカのアイロニーに満ちたトラウマはまだまだ深い。病氣回復への道のりは，まだ遠い。そして，今日もイラクで人が死んだ。

注

- (1) ラインホルド・ニーバー『アメリカ史のアイロニー』大木英夫，深井智朗訳，聖学院大学出版会，2002年，21・22頁。
- (2) 森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身 アメリカ「超保守派」の世界観』講談社文庫，2003年など参照。
- (3) マリアンネ・ウェーバー『マックス・ウェーバー（ ）』大久保和郎訳，みすず書房，1963年，223頁。
- (4) マリアンネ・ウェーバー，前掲書，224頁より再引用。
- (5) マリアンネ・ウェーバー，前掲書，228頁。
- (6) マリアンネ・ウェーバー，前掲書，228頁。
- (7) マックス・ウェーバー「アメリカ合衆国における“教会”と“セクト”」，『成蹊大学政治経済論叢』安藤英治訳，16巻3号。
- (8) 上山安敏『フロイトとユング 精神分析運動とヨーロッパ知識社会』岩波書店，1989年，505頁参照。
- (9) マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳，岩波書店，1988年，268・9頁。
- (10) 上山安敏『フロイトとユング』，前掲書，とくに「X 章アメリカ・シャーマン・スピリチュアリズム」参照。
- (11) 上山安敏『フロイトとユング』，前掲書，486頁より再引用。
- (12) C. G. ユング『ユング自伝（2）』（ヤッフエ編），河合・藤縄・出井訳，みすず書房，1973年，68, 69頁。
- (13) 森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』，前掲書，78頁以下参照。
- (14) ラインホルド・ニーバー『アメリカ史のアイロニー』，前掲書，46頁。
- (15) ラインホルド・ニーバー『アメリカ史のアイロニー』，前掲書，79頁より再引用。
- (16) 大西直樹『ピルグリム・ファーザーズという神話 作られた「アメリカ建国」』，講談社，1998年，41頁。
- (17) E. H. エリクソン『青年ルター⁽¹⁾』，西平直訳，みすず書房，2002年，5頁。
- (18) 大西直樹『ピルグリム・ファーザーズという神話』，前掲書，43頁より再引用。
- (19) 森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』，前掲書，80頁より再引用。
- (20) 森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』，前掲書，181・2頁より再引用。
- (21) 「AERA」2003年4月14日号，31頁。
- (22) 西谷・鶴飼・宇野『アメリカ・宗教・戦争』，せりか書房，2003年，31頁以下参照。
- (23) ロバート・N・ベラー『破られた契約 アメリカ宗教思想の伝統と試練』，松本・中川訳，未来社，1983年（新装版1998年）参照。なお原著では副題が，

“ American Civil Religion in Time of Trial ” となっている。

- (24) ロバート・N・ベラー 『破られた契約』, 前掲書, 51 頁。
- (25) ロバート・N・ベラー 『破られた契約』, 前掲書, 250・1 頁。
- (26) ロバート・N・ベラー 『破られた契約』, 前掲書, 255 頁。
- (27) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 86 頁。
- (28) 柄谷行人 『日本精神分析』, 文芸春秋社, 2002 年, 81 頁参照。
- (29) 岸田秀・小滝透 『アメリカの正義病・イスラムの原理病 - 一神教の病理を読み解く』, 春秋社, 2002 年, 参照。
- (30) 岸田秀・小滝透 『アメリカの正義病・イスラムの原理病』, 前掲書, 135 頁より再引用。
- (31) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 21・22 頁。
- (32) 植木献 『人間の自由とその限界 ラインホルド・ニーバーにおけるアイロニー』, 『日本の神学』42 号 (日本基督教学会, 2003 年) 所収, 96 頁。
- (33) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 223 頁。
- (34) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 22 頁。
- (35) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書。大国については117頁, 原子爆弾については68頁, 日本への態度については224頁参照。
- (36) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 236・7 頁。
- (37) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 82 頁。
- (38) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 47・8 頁。
- (39) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 64 頁。
- (40) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 68・9 頁。
- (41) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 237 頁参照。
- (42) ラインホルド・ニーバー 『アメリカ史のアイロニー』, 前掲書, 201 頁。